



食中毒原因微生物のリスク評価案件の選定に関する意見交換会

6月22日(金)と25日(月)、東京と大阪において、食中毒原因微生物に関するリスク評価についての意見交換会が行われました。これは、食品安全委員会が自らの判断で行うリスク評価として、まず、鶏肉を主とする畜産物中のカンピロバクター・ジェジュニ/コリについて、リスク評価に向けた具体的な検討に入ること、その他の微生物については、さらに必要な情報収集を行った上で検討を進めていく方針

となったことなどを受けたものです。

当日は、専門調査会専門委員からこれまでの経緯や委員会が作成した評価指針の説明、各微生物についての科学的知見の現状等についての講演の後、自ら評価案件の優先順位、今後のリスク評価の進め方などについて、様々な立場の方々からの意見が交わされました。

詳しい資料・議事録等は下記をご参照ください。

HP 東京：<http://www.fsc.go.jp/koukan/risk190622/risk-tokyo190622.html>

大阪：<http://www.fsc.go.jp/koukan/risk190625/risk-oosaka190625.html>

海外からの講師招聘による講演および意見交換会

本年3月～5月、食品安全委員会では、海外から講師をお招きしての講演および意見交換会を4回、東京において開催しました。その講演テーマと概要をご紹介します。なお、詳しい議事録や資料は、文末のURLでご覧頂けますのでご参照ください。



FDA/CFSSANのリスク評価 ーリスク評価リソースの活用についてー

3月7日(水)、米国食品医薬品庁(FDA)
CFSSANのロバート・ブキャナン博士より、米国にお

ける食中毒原因微生物等のリスク評価とリスク管理のフレームワーク、リスクコミュニケーション等について講演が行われました。明解なプロセスに基づいた実践的な手法の解説や実行上のアドバイスなど、充実した内容の講演でした。その後の意見交換では、微生物のリスク評価の特徴や評価に必要な要素などについて、活発な意見が交わされました。

▶ <http://www.fsc.go.jp/koukan/risk190307/risk-tokyo190307.html>

- ロバート・ブキャナン氏(Dr.Robert Buchanan):食品科学博士。FDA/CFSSAN シニアサイエンスアドバイザー、科学局長。全米科学アカデミー新興感染症対策委員会委員。
- CFSSAN:米国食品安全・応用栄養センター。添加物、汚染物質、バイオテクノロジー関連食品のリスク評価と、それらの危害要因や表示についての規制を行う。



食品安全に関する認知ギャップを埋める ーEU SAFE FOODS プロジェクトの取組ー

3月19日(月)、英国食品研究所のジュリー・ホートン氏より、「専門家と消費者における食品の安全

性への認識の相違をどう埋めるかという課題に、EU SAFE FOODSプロジェクトがどう取り組んでいるか」について講演が行われました。専門家と消費者のグループを対象とした調査研究など、具体性に溢れた有意義な内容でした。その後のパネルディスカッションでは欧米と日本における消費者等のリスク認知の違いなどについての議論が交わされました。

▶ <http://www.fsc.go.jp/koukan/risk190319/risk-tokyo190319.htm>

- ジュリー・ホートン氏(Ms.Julie Houghton):英国食品研究所消費科学グループ研究員。リスク認知、リスクコミュニケーション、それらの調査手法開発等の研究分野で活躍。2004年より欧州共同体の「SAFE FOODS」プロジェクトに参加。
- 英国食品研究所:食品及び食品に由来する疾病管理等を行う英国の研究機関。



BSE及びvCJDに関する リスクコミュニケーション

5月11日(金)ビクトリア大学(カナダ)のコンラッド・ブルンク教授より、BSE問題を例としたリスクコミュニ

ケーションの在り方について講演が行われました。科学者が行うコミュニケーションでおちいりやすい間違い、消費者のリスク認知など、興味深い内容でした。その後のパネルディスカッションでは、小林傳司大阪大学教授をコーディネーターとし、科学者の社会的役割、科学的に不確実な部分の説明の必要性、専門家とメディアの在り方、米国・カナダ産牛肉等の輸入再開などに関するさまざまな意見が、パネリストと会場で交わされました。

▶ <http://www.fsc.go.jp/koukan/risk190511/risk-tokyo190511.html>

- コンラッド・ブルンク氏(Dr.Conrad G. Brunk):哲学博士。カナダ・ビクトリア大学教授、同大宗教・社会学研究所所長。環境・健康に係るリスク管理、リスク認知、リスクコミュニケーション等の研究分野で活躍。WHOやカナダ政府機関での委員等を歴任し、現在、カナダ農務・農産食品省の専門委員も務める。



米国における農薬登録と 健康影響評価について

5月15日(火)、米国環境保護庁のロイス・ロッシン氏より、1996年に制定された食品品質保護法

のもと、米国で使用されているすべての農薬の安全性を再評価するなど、農薬の安全性評価に関する先進的な取組を行っている米国の状況について講演が行われました。その後の意見交換では、米国の農薬基準設定の際の近隣諸国との情報交換、経口摂取以外の吸入・経皮毒性の評価等について、活発な意見交換が行われました。

▶ <http://www.fsc.go.jp/koukan/risk190515/risk-tokyo190515.html>

- ロイス・ロッシン氏(Ms.Loïs Rossi):米国環境保護庁において食品品質保護法に基づく登録農薬の再評価プロジェクトを主導。現在、農薬プログラム登録担当課長。コーデックス残留農薬部会(CCPR)やOECD農薬作業部会において進められている、農薬の安全性評価の国際協調の推進にも取り組んでいる。